



里親だより



vol. 49

令和1年(2019年)11月11日発行
長野県里親だより編集委員会

里親の日(10月4日)の広報活動

長野県児童相談所広域支援センター
里親等委託調整員 竹ノ内 佑士

カレンダーをめくり、今日がふと何の日か知りたくなる時がありませんか。有名な記念日から、初めて聞いた記念日まで、全国には様々な記念日が設けられています。

10月4日には何の記念日があるのか調べてみると、宇宙開発記念日や、イ(1)ワ(0)シ(4)の語呂合せでイワシの日などがありました。この里親だよりを読んでいる方は既にご存知かもしれませんが、10月4日は里親の日でもあります。今からおよそ70年前、1948年(昭和23年)に里親制度の運営が施行され、2年後の1950年に里親の日が制定されました。当時はまだ、里親制度という言葉が広く浸透していませんでしたが、これほど長い年月、里親制度が全国で続いてきたのは、里親、里親会、乳児院、児童養護施設など多くの方の意志が続いてきたからです。

児童相談所と児童相談所広域支援センターでは、今年の里親の日に里親、里親会、乳児院、児童養護施設の方にご参加いただき、県内5か所で里親の広報・啓発活動を行いました。長野駅では長野県のゆるキャラ、アルクマが応援に来てくれるということで、前日から胸を膨らませていましたが、深夜には窓を叩くような雨が降り、アルクマが雨に濡れて風邪をひいてしまい、到着できないのではないかと不安が募りました。

けれど、そんな心配をよそに当日の長野市は晴天、秋の清涼が心地よい日となりました。みんなの期待に応じて颯爽と登場する元気なアルクマは、周囲の人たちを明るく元気づけてくれます。天気だけではなく、私たちの気持ちも晴れやかにしてくれる、かわいくも頼りになるアルクマの応援もあり、無事、アルクマの絵柄の里親啓発用ポケットティッシュを配り終えることができました。

ささやかな啓発物品の配布でしたが、少しでも多くの方に里親制度が目にとまり、頭の片隅に残ってくればと思います。小さな種は、行政、市民の認知を経て、いつか大きな花が咲き誇る日がきます。その日まで活動を続けていきたいと思っています。



第 59 回長野県里親大会

長野市里親会 会長 金井 浩二

今年の里親大会は、長野市里親会と北信・上小地区里親会(つむぎの会)となりました。

第1回目の大会実行委員会は1年前の2018年11月15日でした。今回の里親大会は里親の委託率が低い現状も考えて「里親を知ろう！こどもの未来を考えよう！」というテーマで広く一般の方にもご参加いただけるような大会にしようと皆さんで決めました。

毎年、大会のメインとなるのは講演者です。そこで今回はタケカワユキヒデさん、杉良太郎さん、さだまさしさん、川嶋愛さんが候補に上がりました。何回かの話し合いの中で、今回は長野県内で人気のある松山三四六さんを司会としたパネルディスカッションが良いのではないかと話になりました。

事前の三四六さんとの話し合いでは、三四六さんのSNSやテレビ、ラジオ番組での宣伝もしていただけると言う事になり、一般の方へのアピールもできる見通しとなりました。

パネルディスカッションのパネラーは長野大学学長 中村英三さん、ながの子どもを虐待から守る会会長 有吉美知子さん、一般社団法人ベアホープ代表理事 ロング朋子さん、認定NPO法人フリーキッズ・ヴィレッジ理事長 宇津孝子さん、そして里親、里子さんの6名となりました。

また、今回の大会はいつもの大会よりも運営費がかかることを見越して、長野県みらい基金を通じて寄付金の募集を行い、里親大会として初めてポスターやピラを作成しました。

10月4日の「里親の日」には長野駅前児童相談所の方々と大会のピラを朝の通勤の方々に配りました。

実行委員会は合計で10回を重ね、10月12日の準備の日となりました。数日前から巨大な台風の予想でありましたが、長野県を直撃するというような情報はありませんでしたので、前日の準備を行い、もし何かあった場合には翌朝7時に中止の連絡をすることにしました。

その夜です。私の自宅は松代町ですが、何度も何度もスマートフォンの警告が鳴り響き、千曲川を越水したという情報が頻繁に入りはじめました。自宅のある団地も避難勧告が出ました。

そして、篠ノ井横田や、開催会場の東部文化ホール近くの穂保地区での冠水の情報を聞いたときにはもう中止するしかないと思い、朝の5時に関係者に大会中止の連絡をしました。

その日の朝、東部文化ホールに行きましたが、その周辺の被害はなかったのですが、駐車場には消防署、警察、自衛隊などの車がたくさん停まっては慌ただしく出発して行き、上空にはヘリコプターが頻繁に飛んでいました。

今回は長野市里親会が50周年と言うこともあり「かけはし」という記念誌をこの大会で配布予定でした。開始予定時間の9時半を過ぎたところで中止の連絡を知らない一般の参加者が何組か訪れ、その方々にはその「かけはし」と当日の資料をお渡しすることができました。

今回は予期せぬ天災によって大会が中止となりましたが、関係者の方々はたくさんの時間を準備に費やしていますので、またいつかこのような大会ができればと思います。

その時には皆さんで今回できなかったお話をたくさんして、里親、里子のことを知っていただき、こどもの未来を考えたいと思います。

研修会の報告

「子どもを育む対話について学ぶ研修会」

里親 藤沢 雅実

本年度、第1回目の里親更新研修に参加させていただきました。

日常生活に追われ、子どもの成長について考えるゆとりのない毎日でしたが、今回の研修では私たちの日々の関わり方が、子どもの成長にどのように影響するのかを改めて考えさせられました。

こんな風に成長して欲しい、こんな事はして欲しくないと、かくあるべき姿を描くあまりに、子どもの「すこやかさ」を在りのままに受け止める事が出来なくなっていたなあと、自己反省の研修になりました。

数年前、子供がこんな自慢話をしました。

「今日はね、一時間目からトイレに行きたくて我慢してたんだ。一時間目の休み時間に行こうと思って我慢してたんだけど、友達が休み時間に一緒に遊ぼうと誘ってくれたから、我慢して遊んでたんだ。行こうとは思ってたけど、チャイムが鳴ったから、トイレに行かずに、教室に入ったんだ。二時間目も我慢したよ。二時間目に休み時間にトイレに行ったら気持ち良かった。すごいでしょ。」

その時、「そうか、我慢できたし、気持ちよくおしっこできて良かったね。」とは言えませんでした。

講師の渡邊先生の“機中八策”のお話を聞きながら、私たちの関り方がいかに子供にわかりづらい方法であり、ブルーカードを切っていたか（非暴力的な雰囲気を出していたか）“すこやかさ”を無視していたかを再認識することになりました。

子供たちが今の環境に辿り着くまで、安全基地を求め続けていたはずですが。ようやくたどり着いた安全基地であるはずの私たちが、かくあるべき姿を追い求め、ブルーカードを出し続けていたら子供たちは“すこやかさ”を失ってしまうでしょう。

オレンジカード（褒める・待つ・練習・代りにすることを提示する・環境作り・約束・気持ちに理解を示す・落ち着く☺ほまれかがやきを）を出せる親になりたいものです。



【特別寄稿】



特別寄稿掲載にあたって

中央児童相談所・児童相談所広域支援センター
所長 宮沢 秀一

令和元年6月12日、長野市里親会に所属し、長年、御主人の長田秀夫さん（長年、長野市里親会長として活動）と共に、里親として多くの子どもたちを受け入れていただいていた長野市の長田禮子さんがご逝去されました。突然のことでした。そんな折、以前、里親だよりに元里子として、何回か寄稿してもらっていたYさん（山口努さん）から、長田禮子さんのご逝去を悼み、里親さん方に小学生の頃から長田さんのお宅に一時里親としてお世話になった感謝のメッセージを残したいと申し出があり、今号に寄稿をお願いしました。

ここに謹んで長田禮子さんのご冥福をお祈りいたします。

なお、今回は上記のような主旨での寄稿ですので、御本人及び長田秀夫さんに了解を得て実名で掲載させていただくこととしました。

里親を失うということ

山口 努（東京在住）

優しい人だった。料理が好きで、何を作っても常人離れした美味しさがあった。冗談を言えば「あなたは変わらないね」とつねに笑みを浮かべていた。

もうその笑顔を見ることはない。

今年6月、おばちゃんはこの世を去った。

実母は私が11歳の7月、この世を去った。ちょうどその頃、長田家にお世話になった。2歳から施設でしか生活を送ったことのない私にとって「家庭」を味わえた。

それまでの里親さんとは別格の愛情を与えてくれ、願いが叶うなら長田家にずっといたかったし、施設に帰りたくはなかった。

18歳までお世話になり、社会に出てからも毎年長田家を訪ね、母の日には電話をした。

毎年、自分の母親の命日には帰郷し、雑木林に囲まれた長田家を訪ね、とりとめのない話をした。

今年の母の日も電話をし「会社を作ったんだって？どんな会社なの？」と聞かれ、冗談を交えながら「詳しくは7月にね。元気でね」と言い、電話を切った。

この会話がおばちゃんとの最後のものになった。

訃報を聞いたとき、喋れなくなった。

翌日、別れを告げるため帰郷し、冷たくなったおばちゃんが入った棺に立ち上げたばかりの自分の会社の名刺を入れた。

数年前、兄とは都合が合わず、友人と長田家を訪ねたことがあった。毎年夏と冬に一方的に送りつづけた「とらや」の羊羹を手渡し、友人の都合もあり足早に帰ろうとした。

帰り際、難病を患い、歩くことも困難になっていたおばちゃんは背伸びをし、窓から「努に会えてよかった」と私に言った。

この日のことなのか、これまでのことなのか、もう知る術はない。

今年も母親の命日に長田家を訪ねた。遺影を見ながら、おじちゃんに「おばちゃんは何出かけてるの？」と聞くと「出かけてるよ」と笑っていた。

帰り際、雑木林の木漏れ日の向こうにおばちゃんが立っていて、変わらない笑顔で見送られている気がした。

里親と里子の関係は肉体が減びても、心の中で生き続けるものだと思う。永遠に。

里親支援専門相談員より



「子どもの行動を考える」

軽井沢学園
地域里親家庭サポートセンタースマイル
里親支援専門相談員 金子 悠一郎

先日、佐久里親会のサロン前に時間をいただき、「子どもの行動を考える」というタイトルのもと、「問題行動を考える」「子どもの発達」「社会的養護の子どもの特性」「トラウマ」「里親養育で生じる否定的感情」「HSC (Highly Sensitive Child)」の視点から子どもの行動を考えていきました。ここでは、「トラウマ」と「里親養育で生じる否定的感情」のポイントをお話ししていきたいと思えます。

トラウマとは、「個人が持っている対処法では、対処することができないような圧倒的な体験をすることによって被る、著しい心理的ストレス（心的外傷）」です。社会的養護下の子どもたちは虐待や性被害、暴力の目撃、喪失体験等、様々な経験をしています。先に挙げた経験はトラウマの原因になり得ます。特に、年齢不相応な性的体験はトラウマとなりうるとも言われています。

トラウマについて少し触れましたが、里親養育において1番知っておいてほしい点があります。それは、『トラウマを受けた子どもと接したり、そのできごとの話を聞いたりするだけで、里親を含めた一緒に生活している人々にもトラウマ反応が生じることがある』ということです。

そして、「子どものトラウマ的経験への直面は、里親にそれまでの養育者、児童福祉システム、社会に対しての不安や強い怒りの感情、フラストレーションを引き起こす」とも

言われています。

そのため、一緒に生活している人が、最近、急に怒りっぽくなったとか、元気がなくなった等、以前とは違う様子が頻繁に見られるようになったら要注意です。もしかしたら、トラウマ反応かも？ということの頭の片隅に入れておいていただければと思います。

今回の学習会では、「HSC（Highly Sensitive Child）人一倍敏感な子ども」に触れることができませんでした。この概念を社会的養護下の子どもに持ち込むことに正直迷いがありますが、私は社会的養護下の子どもの中にも一定数いるのではないかなと思っています。

このお話はまたどこかで皆さんと一緒に考えていければと思います。ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

<参考文献>

- ▶ 伊藤正哉・櫻村正美・堀越勝（2012）. こころを癒すノートトラウマの認知処理療法自習帳—創元社
- ▶ 亀岡智美（2016）. 児童養護施設におけるトラウマケア～虐待との関連から考える～平成 28 年度一般財団法人長野県児童福祉施設連盟第 1 回心理部会配布資料
- ▶ Margaret M. Holmes（2000）. A Terrible Thing Happened 飛鳥井望・亀岡智美（監訳）—杉由美（訳）（2015）. こわい目にあったアライグマくん 誠信書房
- ▶ 岡野憲一郎（2008）. トラウマ 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 心理臨床大事典 培風館 p708-712.
- ▶ 白川美也子（2016）. 赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア—自分を愛する力を取り戻す〔心理教育〕の本 （株）アスク・ヒューマン・ケア
- ▶ ゆうきゆう・ソウ（2014）マンガで分かる心療内科⑩ 少年画報社

台風19号の被害にあわれた方に、お見舞い申し上げます。
また、今回の災害により県内外から多数の方に、ご支援をいただいていることへの感謝とともに、一日も早い復興を心よりお祈り致します。

編集委員会一同

「里親だより」は、下記の長野県公式ホームページでも御覧になれます。

URL： <https://www.pref.nagano.lg.jp/chuojido/koikishien.html>

（長野県→中央児童相談所→児童相談所広域支援センターのページ内）

発行：長野県里親だより編集委員会

〒380-0872 長野市南長野妻科 144 児童相談所広域支援センター内

TEL：026-238-8030 FAX：026-238-8025

メール：satoya-shien@pref.nagano.lg.jp

